

commons: schola vol.4

Ryuichi Sakamoto Selections:  
**Ravel**

General Editor: Ryuichi Sakamoto

## scholiaのために

スコラ (schola) とはラテン語で「学校」という意味です。よく「スコラ的 (scholastic)」という言葉葉を耳にしますが、これは「煩瑣<sup>はんさ</sup>で、堅苦しい」という、どちらかというとも悪い意味で使われます。しかし、わたしたちがこのCDシリーズをscholaと名付けたからといって、決してスコラ的な「音楽学」や、堅苦しい「音楽鑑賞」を強要しようというわけではありません。むしろそういうものから自由になることを目指しているのです。といって、自分だけの好みの世界に閉じこもるのでもなく、みんながゆるやかに共有できるスタンダード (標準) を作り直すことにより、音楽の歓びを、より広く、より深く共有することができたら素晴らしい。scholiaは、学ぶことが楽しみであるような、しかし厳然たる基準をもった、みんなの学校でありたいと思います。

現在、インターネットの普及により、誰もがあらゆる音楽情報に簡単にアクセスできるようになりました。それによって、音楽はいい意味でも悪い意味でも優劣をつけられることなく、並列化されつつあります。旧来の型にはまった音楽観——西洋クラシック音楽を優れたものとし、伝統音楽やポピュラー

音楽を劣ったものと見る——が相対化されたことは歓迎すべきことです。実はそのような価値観の見直しは20世紀の最後の四半世紀に起こってきました。

すなわち——、

\*クラシック音楽はもっぱら西洋において単線的に発生・進歩したのではなく、それは非西洋文化との接触から生まれ、それ以後もずっと非西洋文化との相互干渉の下にあった

\*クラシック音楽は、「ハイ・カルチャー（高級文化）」として純粹培養されてきたわけではなく、社会（社交）的な場面で、したがってまた常に「軽音楽」と混じり合いながら、創造・享受されてきた

\*クラシック音楽の歴史は、バッハやベートーヴェンといった「巨匠」だけではなく、19世紀以来「マインナー」な存在として脇に押しやられてきた多種多様な音楽家たちによって織り成されている——等々。

こうした歴史の見直しもあって、今わたしたちは、ありとあらゆる音楽が無差別に並列された混沌の前に立たされることになりました。そのような状況に対して schola が企てるのは、ほどよい一般性をもった文化の教科書を作り出すことではなく、圧倒的に突出した音楽を拾いつつ、そこから普遍性をもったスタンダード（標準）を作り出そうという、きわめて野心的なプロジェクトなのです。このようなスタンダード（標準）の選定は、たんに広くバランスのとれた知識だけによつては不可能でしょう。場合によっては、選者が個人的なこだわりから特殊な音楽を選ぶことがあってもいい。そういう特殊性から

こそ、普遍性に通ずるスタンダード（標準）は生み出されるのです。文化の規則性からはみ出した例外であるからこそ、いつでもどこでも新しく響く——それこそが本当の「古典（クラシック）」と言うべきではないでしょうか。

schola は、退屈な知識の詰まった教科書を捨て、例外的であるがゆえに普遍的であることを目指し、すべての人を見知らぬ音楽との出会いへと誘います。